

「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」について

1. はじめに

「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」については、平成 22 年度第 3 回ヒグマ保護管理方針検討会議において、「平成 23 年度以降の進め方について」という議題のなかで議論された。そのなかで、「中長期的な管理のあり方」の作成スケジュールについて、平成 23 年度の夏頃までに複数シナリオを作成し、シナリオをもとに 2～3 年かけて地元と合意形成を図っていくという提案がなされた。また、「将来シナリオ」は、「中長期的な管理のあり方」を作成する際に、地元の説明する資料として作成する複数のシナリオとされた。

しかし、第 3 回ヒグマ保護管理方針検討会議では、「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」についての詳細は議論されなかった。

2. 「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」が議論された背景

知床世界自然遺産地域におけるヒグマ保護管理の最大の目的は、人とヒグマの軋轢を解消することにある。ヒグマ対策の方向性として、知床世界自然遺産地域からヒグマ個体群を根絶させる方向の選択はできないが、限られた管理パワーをどう分配するかについては選択できる。その選択には地域の意向を反映させる必要があるため、ヒグマの保護管理に関しては地元との合意形成が不可欠である。

そこで、多様な利害関係者との調整を踏まえて作成するヒグマ対策の方針として「中長期的な管理のあり方」が想定され、その作成プロセスとして、保護管理上の課題を踏まえた将来の管理のあり方に関する「将来シナリオ」を複数作成し、利害関係者に選択して頂く方法が提案された。

3. 「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」について

「将来シナリオ」については、保護管理上の課題を踏まえた複数の将来の管理のあり方をまとめることとなっているが、知床世界自然遺産地域において、ヒグマを根絶させるような管理を推奨することはできないため、ヒグマ対策として地域住民に示すことのできる将来の方向性は、管理パワーをどう分配するかに限られる。管理パワーの分配については、現状の管理を続けるか、利用者への周知徹底と集落周辺でのヒグマ対策を重点的に実施し、追い払いにかかる努力を減らすかなど、取り得るオプションは限られる。

「中長期的な管理のあり方」については、「将来シナリオ」が限定されるのみならず、取りまとめられた知床半島ヒグマ保護管理方針（以下、保護管理方針）の根幹となる管理の目的、管理の基本方針、管理の目標として、すでに一定の議論を経て盛り込まれていると考えられることから、これらを前提として整理することにならざるを得ない。

